写真は語る

長野市公文書館資料【昭和（戦前）】（2/3）

長 野 市 公 文 書 館

はじめに

長野市公文書館が、公文書館所蔵の資料や『長野市誌』を中心に、長野市域の歴史を市民に分かりやすく記述した「探究ながの史」の連載を『長野市民新聞』に開始したのは、平成 23 年のことでした。その後、「写真は語る」「公文書館資料が語る戦後 70 年」「公文書館資料で振り返る市町村の歩みと暮らし」と、続けてきました。

長野市域の歴史に対する理解を広く市民共通のものにしていくためには、新聞連載だけではどうしても限界があります。地域の歩みをより一層身近な出来事として受け止めていただけるよう、今回これらの記事をホームページに掲載することとしました。

「公文書館資料が語る戦後 70 年」に続き、第２弾として「写真は語る」（平成 26 年 5 月 3 日~27 年 5 月 30 日掲載）を掲載します。長野市公文書館が所蔵する写真をもとに、長野市の歩みや市民の生活、市を襲った災害などの様子について記述したものです。多くの市民の方に読んでいただけることを願っています。

No.	タ　イ　ト　ル　名	執筆専門主事	掲載年月日	頁
9	橋上に群集が群がる -篠ノ井橋の架橋と渡り初め-	西澤　安彦	2014年 9月 6日	18
10	野球やスケート盛ん -上空から撮影　城山公園一帯-	西澤　安彦	2014年 9月20日	20
11	プール開き 大勢見物 -長野市営水泳場が山王小西側に完成-	宮原　秀世	2014年10月18日	22
12	上空から模擬弾投下 -市民を動員し初の防空演習-	関　秀延	2014年11月 1日	24
13	渡り初め見物一万人 -両側に歩道つきで丹波島橋竣工-	松島　耕二	2014年11月15日	26
14	失業対策かねて建設 -狐池上松線(展望道路)-	宮原　秀世	2014年12月20日	28
15	来賓や生徒が壇囲む -市町村をあげて戦没者の葬儀-	西澤　安彦	2015年 1月 3日	30

※本稿は長野市民新聞連載「写真は語る　長野市公文書館資料」〔2014年(平成26年)5月3日～2015年(平成27年)5月30日)〕を、ホームページ掲載にあたり一部加筆・修正を加えたものです。
　なお、本稿のホームページ掲載にあたって、御協力いただきました長野市民新聞社様にお礼申し上げます。

9 橋上に群集が群がる

－篠ノ井橋の架橋と渡り初め－

長野市篠ノ井地籍は、江戸時代には北国往還が通り、交通の要地でした。明治５年（1872）ごろには、渡船場であった千曲川の矢代（屋代）の渡しに舟を 12 艘（そう）並べて長さ約 80m、幅約３ｍの船橋が架けられました。北国往還は国道５号線となりました。船橋は明治 22 年に木橋となり、43 年 10 月に篠ノ井橋仮橋に架け替えられました。長さ約 270m、幅約 3.6mの県営の橋で、国道方面から篠ノ井停車場への運輸が便利になりました。

大正８年（1919）４月に道路法が公布されました。この法律では道路を国道・府県道・郡道・市道・町村道とし、それまでまちまちだった道路の認定基準をきちんと定めました。産業・経済が発達して道路の利用度が高まり、整備が必要となってきていたからでした。

東京から府県庁所在地・師団司令部所在地・重要な港などに通じる路線は国道に指定されました。長野市を通る国道は 10 号線で、当時は碓氷峠を越えて長野県に入り、小諸・上田・飯山を経て新潟県へ出て、秋田まで至る路線でした。

大正 12 年 12 月 28 日、篠ノ井と屋代を結ぶ国道 10 号線の篠ノ井橋の架設工事が着工しました。取り付け道路の工事がなかなか進まず、地元民から「渡らずの橋（不渡り橋）」などとからかわれていた工事も約４年をかけて昭和２年（1927）10 月に竣工し、11 月 22 日に開通式を迎えました。

橋は長さ約 453m、幅約６ｍで、総工費は約 55 万４千円かかり、このうち道路費は約 15 万１千円（地元寄付は１割）でした。国庫から橋に３分の２、取り付け道路に２分の１の補助がありました。

当日午前 11 時から、内務大臣代理はじめ県知事・地元関係者多数の参列を得て式典が執り行われました。渡り初めに選ばれた雨宮縣村（千曲市雨宮）の依田徳右衛門家の３夫婦と神職を先頭に一同が橋の上を歩き出すと、身動きできないくらいに集まっていた群衆はドッと橋上に群がり、「さしもに頑強な篠ノ井橋も一時は墜落するかと危ぶまれた」ほどでした。

坂城からの芸妓（げいぎ）連が練り歩いて踊ったり、太神楽などもあって、空前の人出に興を添えました。篠ノ井町長は「橋が開通したからといって直接に受ける当町の利益等はほとんど無い」と述べるなど、地元の受け止めはおおむね冷めていました。

しかしその後、太平洋戦争中の軍需産業や戦後の自動車輸送の発達に、国道と篠ノ井橋は大きな役割を果たしていきました。

篠ノ井橋の渡り初め。群集が橋上を埋めた（昭和 2 年 11 月 22 日）

10　野球やスケート盛ん

－上空から撮影 城山公園一帯－

掲載の写真には、「昭和４年（1929）８月 30 日」と撮影年月日が記されています。城山公園一帯の上空から撮影されたもので、昭和初期の航空写真は数が少ない上に日付があることで、より一層貴重な資料といえます。写真の方位は、大まかにみて向かって左下隅が北で、右上隅が南になります。

写っている主な施設は、左から城山の野球場、噴水（二重円）を核とした公園、商品陳列館（噴水の斜め左上の建物）、そして中央から右手一帯は善光寺境内で、斜めに右下に三つ並んでいるのが千鳥ヶ池です。昭和６年３月開局の NHK 長野放送局の建物はまだありません。

明治時代後半から大正時代にかけて、野球・庭球、ウインタースポーツのスキー・スケートなどが学校や市民の間に普及していきました。野球熱の高まりの中、大正 15 年（1926）7 月、長野体育協会の城山グラウンドが完成しました。球場開きでは、７月 14 日に清はらい式を、翌 15 日に大観衆の応援を受けて法政チームと三田クラブの試合が行われました。

球場開きの準備に慌ただしかった 11 日夜、大門町・横町・横沢町方面の水道が突然断水しました。原因は日照りのためグラウンドへ水道水を大量に散水したからでした。真夜中に「市民が大切か、体育協会が大切か」と住民が市議に詰め寄る一幕もありました。

明治 43 年（1910）２月、諏訪湖研究者の橋本福松（古今書院創設者）が長野付近のスケート場（氷滑場）の調査を実施し、千鳥ヶ池（中でも中央の池）が好適であることを確かめました。翌 44 年１月 22 日には長野スケート倶楽部の発会式と競技会が千鳥ヶ池で開催されました。当日は諏訪からスケート選手の田中克己を招いての模範演技や 400 ヤード（約 360m）競走、３人スケーティングなどが行われています。

明治 41 年９月、城山一帯を会場に県主催で１府 10 県連合共進会が開かれました。その折に建てられた参考館は、焼失した県庁の仮庁舎として一時期使用されていたこともありました。45 年の善光寺御開帳を機に長野商業会議所はこれを借り受けて、長野県物産展を開催し大好評でした。ちなみに、このときの御開帳で参詣客は初めて 100 万人の大台を突破しました。

その後、会議所は国の認可を得て商品陳列館として経営することになり、大正３年７月１日、県下各郡市や岐阜県から出品の約４千点を陳列して開館しました。第二次世界大戦後は長野市公民館・日米文化センターなどとして利用されました。

大正４年 11 月の大正天皇即位を記念して同年６月、長野市は御大典記念公園の建設を決定しました。城山大通りの北側に西洋式庭園を造り中央に大噴水を設置する、というものでした。噴水は 11 月６日に試通し、10 日の即位式から放水を開始しました。噴水管の口径１インチ（約 2.5cm）のとき、水は 20m以上に達し日本一の大噴水と称賛されました。工費は約 9,600 円で、一般公開は５年５月からでした。

現在の城山公園一帯は野球場も商品陳列館もなくなり、千鳥ヶ池は多くが埋め立てられ、写真撮影当時と比べ様相は大きく変わりました。しかし長野市民憩いの空間としての役割を、今後も変わらずに担い続けていくことでしょう。

空から見た城山公園一帯。深田町上空から撮影（昭和４年８月 30 日）

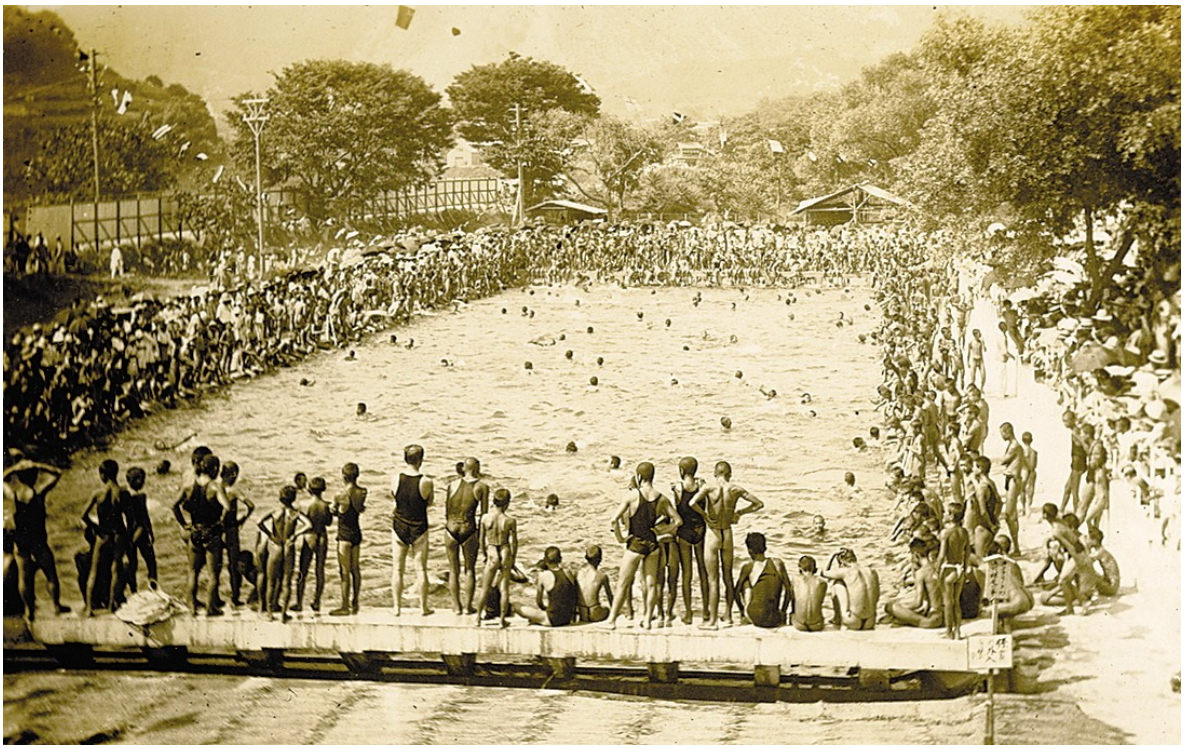
11 プール開き 大勢見物

－長野市営水泳場が山王小西側に完成－

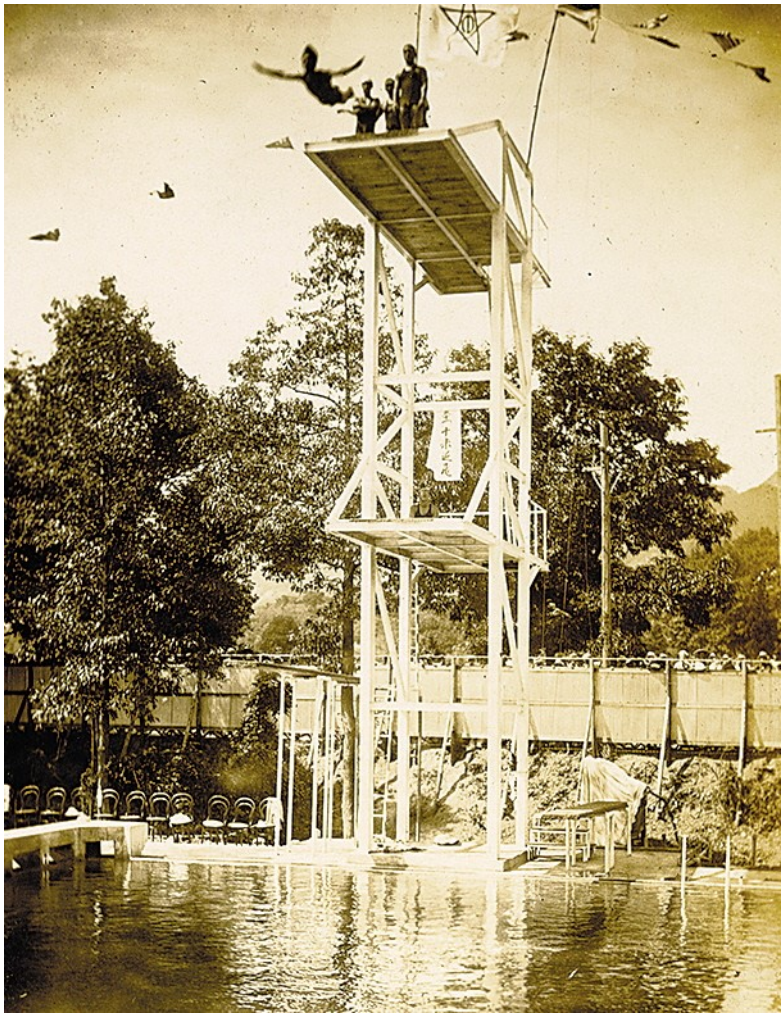
昭和５年（1930）９月３日、長野市営球場とともに御大典記念事業として計画された長野市営水泳場（県下初の公認プール）が山王小学校西側（現在の校庭）に完成しました。用地は約 1,500 坪（4,950 平方メートル）で総工費約３万１千円を費やし、①長さ 50m、幅 15mの大プール、②高さ 10mと 5mのダイビングボードに長さ３ｍと１ｍのスプリングボードを併設した飛び込みプール、③「滝プール」と呼ばれていた小学生向きの練習池などがありました。

このプールの完成に至るまでには、さまざまな問題がありました。昭和３年 12 月には、すでに裾花川の相生橋東側に市営プールを建設する計画が決定されていました。しかし４年６月の用地買収交渉は、堤防組合の拒否により不調に終わりました。９月には岡田区主催の期成同盟会ができ、南石堂や妻科などの賛成をとりつけ再交渉を続けた結果､12 月の市議会で坪５円､計 7,500 円で用地を買収することを決定しました。

一方、プールの施設費約２万５千円の捻出で、市は行き詰まりをみせましたが、昭和５年５月には県からの７千円の補助が決定し、ようやく６月 18 日に起工にこぎ



入場者で混雑する市営水泳場（昭和５年９月）



山王小学校西側に建設された市営水泳場の飛び込み台

着けました。

プール開きは９月３日午前９時から鈴木県知事や県会議員、その他市内の名士を集め、盛大に挙行されました。天気はよく、加えて物珍しさに多くの見物人が押し掛けました。

最初に型通り修祓（しゅうふつ）式があげられ、用水権をもつ芹田区民の合意を取り付けるため奔走した丸山弁三郎市長の式辞、知事の祝辞がありました。式泳・5m高飛び・10m逆さ飛びなどが行われ、正午から一般市民に開放されました。当時の長野市営プール開場式の報道記事は「処女浪切って嬉しい泳ぎ初め、長野市のプール開き、横田市議、河馬の泳法」との見出しで書かれています。

水泳大会は、市営プールを中心に行われるようになりました。昭和５年９月 21 日、長野市水泳協会主催の第１回県下中等学校水上競技大会が開かれ、須坂中学が優勝し、野沢中学が２位、長野商業・長野工業が３位・４位でした。当時、このプールは長野商業・長野工業・長野中学などの水泳部が練習に使用していました。第１回長野市小学校対抗水上競技大会も７年７月 27 日に行われ、後町小学校と接戦をした山王小学校が、市営プール横という地の利を生かし初優勝しています。

12　上空から模擬弾投下

－市民を動員し初の防空演習－

防空演習が最初に実施されたのは大阪市で昭和３年（1928）のことでした。昭和６年９月に満州事変が始まると、日本各地で防空演習が行われるようになり、翌年５月22日に長野市も軍部・警察・消防などの協力を得て多くの市民を動員し、大規模な防空演習を実施しました。

市長丸山弁三郎は、この年の２月に河原信三（消防部長）が印刷し頒布した『空中爆撃、大震火災に長野市民はどうするのか?』という小冊子が一般市民を覚醒させ、それが演習を行う動機となったとしています。４月 22 日付の信濃毎日新聞は「空からの恐怖に対して近代科学の征空的発達と共に防空警戒の必要性が叫ばれてきた。長野市消防組でも全市民に防空思想の宣伝を必要とし、５月上旬全市的防空演習を決行することになった」と報じました。

４月 23 日には、警察署・消防組・在郷軍人連合分会・警備団の代表者と市の関係者計 17 人で計画案について話し合い、実施期日を５月 22 日とし、軍部の協力で飛行隊・高射砲隊・機関銃隊・歩兵部隊も参加することになりました。演習種目は、①爆弾投下の実演、②空襲および対空動作、③消防・消毒・警備・救護・給与配給動作、④灯

長野市防空演習。建物屋上の機関銃と上空を飛ぶ飛行機

救護訓練をする看護婦たち

火管制、と決めました。

当日、集合所となった柳町小学校（現柳町中学校）では午前８時すぎに役員・防護員が活動を開始しました。最初の爆破演習警戒および高等飛行見学では、２機が南方より飛来し旋回した後、柳町東方に 25 キロ爆弾の模擬弾を投下し、すでに埋めてあった黄色爆薬を爆発させました。穴の大きさや吹き飛んだ土砂の高さなどから、その爆発威力を知らされました。入れ替わりに飛来した戦闘機２機の旋回や宙返り・低空飛行などに、地上の人々は手に汗して固唾（かたず）をのんで見守りました。

午後には、高射砲隊・機関銃隊が弾薬を装填（そうてん）して準備、婦人会・女子青年団員は割烹着（かっぽうぎ）・白襷（しろだすき）で給与作業につきました。午後２時 36 分、戦闘機２機が丹波島橋上空を通過の報に山王高射砲隊は第１弾を発射、ついで城山砲隊および各地区重軽機関銃隊が発射、さらに焼夷弾（黄色）・毒ガス弾（紫色）の投下で煙が全市を覆いつくしました。戦闘機は一端退いてはまた急襲し、本部にも催涙ガス弾が投下されました。

夜間の灯火管制訓練は午後７時から開始されました。丸山市長は全市民に向けて、一人の不注意によりせっかくの灯火管制も真価を失い大事をひき起すことになりかねず、全市民の協力がなければ目的を達成することができないので、全市民の熱意で本演習の最後の美を結びたい、と呼びかけました。

昭和８年８月９日、第１回関東地方防空大演習が実施されました。信濃毎日新聞主筆の桐生悠々は 11 日、評論「関東防空大演習を嗤（わら）ふ」で演習を批判しました。①空襲があったら木造家屋の多い東京は焦土化し、被害は関東大震災並みになる、②空襲は繰り返し行われる、③科学技術の発達で都市の位置は計算できるから灯火管制は意味がない、とし敵機を帝都（東京）の空に迎え撃つということはわが軍の敗北そのものであるなどと論じました。

このため軍部の怒りを買い退社に追い込まれました。しかし太平洋戦争末期には彼が予見した通り、米軍機の大空襲により日本は焦土と化したのです。

13　渡り初め見物一万人

－両側に歩道つきで丹波島橋竣工－

現在の丹波島橋は昭和 58 年（1983）から平成５年（1993）にかけて旧橋を併用しながら架け替えたものですが、船橋時代から数えても 140 年以上の長い歴史を刻む交通の要衝として重要な橋の一つでしょう。

橋のたもとに鎮座する文政３年（1820）建立の善光寺常夜燈や、歩道沿いの４カ所にある江戸時代の渡し舟から旧橋までの丹波島の様子を刻んだレリーフが、この橋の変遷の一端を教えてくれます。

ここに掲載した写真は、昭和７年（1932）12 月 16 日、鉄橋となった旧丹波島橋の竣工式の様子を写したものです。信濃毎日新聞（昭和７年 12 月 17 日付）は当日の模様を「この日稀らしく好天に恵まれ（略）この一大ペーヂエントを見んと犀川河原に押しかけた見物人は一万余人を数えた」と報じていますが、この写真でも式典とそれに続く渡り初め式を一目見ようと人々が群がっているのがよく分かります。写真の右側にはそれまで使用していた木橋から見物している人の姿も見られます。

丹波島は北国往還の善光寺への南玄関であり、江戸時代までは渡し舟によって人や物資が行き来し、犀川の渡しの宿場町としてにぎわいを見せました。

明治時代に入ると渡し舟は廃され、明治６年（1873）に設立された「丹波島船橋会社」が川幅 300 間（約 540m）に 46 艘（そう）の船をつないで船橋を架設し、次いで明治 22 年には「丹波島木橋会社」によって木橋が建設されました。この船橋時代から初代の木橋までは民間による経営で、通行者は船銭や橋銭を払って川を渡っていました。

しかし一般国道 10 号（当時）の沿道橋として有料ではいかがなものかといった議論が県会などで起こり、明治 35 年（1902）に民間委託契約が切れるのを機に官営に移行し、県初の直営工事として２代目の木橋に架け替えられました。

大正３年（1914）３月には長さ 286 間（約 514m）、幅員３間（約 5.4m）の３代目に替わりましたが、自動車をはじめとした交通量の増加などにより国道 10 号線の改修・拡幅と併せて永久橋への架け替えが計画され、昭和６年（1931）に農村振興土木事業（失業救済事業）の一環として着工しました。

そして１年後の昭和７年 12 月、総工費約 88 万円、延長 527m、幅員 12.2m（うち

車道 7.3m、両側に 2.45mの歩道）のゲルバートラス（両岸から梁を鋼材で組み合わせた構造）の優雅な大鉄橋として生まれ変わったのです。当時、歩道つきの橋は極めて珍しいものだったといいます。

鉄橋に架け替えられた丹波島橋の竣工式（昭和 7 年 12 月 16 日）

14　失業対策かねて建設

－狐池上松線（展望道路）－

昭和４年（1929）10 月、ニューヨーク株式市場の大暴落から始まった世界恐慌は、たちまち世界の資本主義諸国に波及し、ことに日本はその影響をまともに受けました。昭和４年から５年にかけて深刻な不況が経済界を襲い、さらに農村恐慌となって吹き荒れました。

日本からアメリカへの輸出の大きな部分を占める生糸の価格が暴落し、長野県下の製糸業は大打撃を受けました。これに頼る労働者や養蚕農家も多く、不況による工場の倒産、操業短縮や停止、繭価の暴落は労働者・農民に大きな影響を与え失業者が増大しました。

そのため県は、失業対策事業の主力を土木事業に集中することになりました。長野市では、あたかも都市計画が認定され、実行に移されるときでもあったので、道路や橋の改修が急ピッチで進められました。

写真の狐池上松線（展望道路）は、昭和８年度の失業応急事業として、国庫補助および県費補助を得て改修した都市計画による遊覧道路です。道路の起点を県道長野二ノ倉線上松地籍に置き、地附山の山腹から納骨堂（雲上殿）前に出て花岡平の霊山寺背面を横切って塩ノ湯の側面に出ます。

さらに往生地の集落を横断して、観音堂の裏に出て水道貯水池の傍らを下り、狐池の集落に出て獅子沢川にかかる子持橋を渡り、女学校（現在の長野西高校）前で市道花吹線に連絡するものです。

昭和７年 11 月１日に起工し、延長 3,310m、幅員８ｍに改修、昭和８年５月 20 日に竣工しました。これによる失業救済人員は延べ６万 4,793 人に上り、総工費 10 万 8,465 円を費やし、このうち国庫補助として２万 7,371 円、県費補助として１万 348 円が交付されました。

そのほか昭和初期、とくに失業対策をかねて建設された道路は、長野一ノ鳥居線（失業救済人員４万 6,353 人）や県道二ノ倉長野線改修工事などがあります。また、南県町から新田町に至る 400mほどは昭和９年２月 24 日に着工し、翌 10 年６月 24 日に幅員 25mの道路が完成して国道 10 号線（現 117 号）に接続し昭和通りとなりました。これによる失業救済人員は述べ 13 万７千人あまりに及びました。

昭和６年の満州事変、７年の 5・15 事件、８年のドイツ・ヒトラー政権成立、11 年の 2・26 事件など、国の内外で戦争の機運が高まっていく状況下での失業対策事業でした。

失業対策事業で建設された狐池上松線（昭和 8 年 5 月 20 日竣工）

15　来賓や生徒が壇囲む

－市町村をあげて戦没者の葬儀－

昭和 12 年(1937)7 月 7 日、中国の北京郊外の盧溝橋で日本と中国の軍隊が衝突し、日中戦争が始まりました。政府は９月２日、この戦争を「支那事変」と名づけ、28 日から華北で総攻撃を開始し、戦線は瞬く間に中国全土へと拡大していきました。そして４年後の昭和 16 年 12 月、とうとう太平洋戦争へと突入したのです。

開戦２年目の昭和 13 年５月 20 日、長野市は徐州陥落を祝って午後 1 時から小学生・女学校生徒の旗行列、同７時から一般市民が参加してちょうちん行列を行っています。太平洋戦争開戦後の昭和 17 年 2 月 18 日には、シンガポール陥落を祝って、「大東亜戦争第一次戦勝祝賀大会」を城山国民学校校庭で行いました。国民学校初等科５年生以上と中等学校全生徒はブラスバンドを先頭に入場し、一般市民なども合わせて約 1 万 8 千人が参加し戦勝を祝賀しました。

戦勝を記念し市民を動員した華々しい行事が行われる一方で、出征する兵士も徐々に増加していきました。長野市では昭和 13 年の徴兵検査で、歩兵・騎兵・工兵などの現役兵に 279 人が編入され、また補充・臨時召集で陸軍・海軍へ 292 人が応召しています。学校関係をみると市内７小学校から教員８人が出征し、家族に出征軍人がいる児童・生徒は、938 人に上っています。

戦没（戦死・戦傷死・戦病死）した兵士の葬儀は、市町村が行っています。長野市では、昭和 13 年に市葬を行った戦没者は 28 人で、15 年には 41 人、17 年には 46 人へと増加しています。昭和 15 年の場合をみると、４月 20 日に 24 人、10 月 19 日に 17 人、いずれも城山運動場において合同の市葬を執行しました。

写真は、昭和 15 年４月 28 日、篠ノ井町（長野市篠ノ井）の通明尋常高等小学校校庭で執り行われた町葬を撮影したものです。正面に壇が設けられ、旗や花輪で飾られて、来賓、児童生徒、町民が三方を取り囲んで多数参列している様子が分かります。

同年５月の上水内郡津和村（長野市信州新町）の葬儀の場合、遺骨が到着すると出迎えをし、後日執行の葬儀に向け軍関係者、国・県・町村関係議員、神社・寺院、各団体長などに宛てて案内状を出しています。葬儀当日は、旗・花輪・村長・写真・遺骨を先頭に、僧侶・警察官・遺族・学校長・議員・区長・各種団体長・軍人分会・警防団・青年団・国防婦人会・児童生徒・一般村民の順で葬列を組み、式場まで行進しました。

太平洋戦争も末期になると、戦没者の激増、激しい本土空襲、食糧増産・勤労動員・防空訓練の強化・徹底など、非常事態が日常化していきました。市町村をあげての葬儀も簡略化されるようになり、戦争が終結してから行われる場合も多かったのです。

戦後になり、長野市の小学校の完全給食は昭和 26 年 2 月から実施されました。このとき調理従事者に失業中の未亡人を採用することになり、職業安定所には 70 人を超える応募者があった、と新聞報道されています。応募者の多くは戦争で夫を失った女性だったと思われます。戦後 28 年たった昭和 48 年の「戦没妻特別給付」によると、該当する女性は 1,003 人いました。家族の中心となる働き手を失い、消えることのない思いを抱いた多くの遺族は、長い戦後を生きなければなりませんでした。

篠ノ井町（長野市篠ノ井）の通明尋常高等小学校（通明小学校）校庭で行われた戦没者の町葬
（昭和 15 年 4 月 28 日）